

フィリピン／アブナール・N・マンラパス

——障害者リーダーのリーダー——

森 壮也・山形辰史

●改造バイクにくくり付けられた車いす

アブナール・N・マンラパス（Abner N. Manlapaz）は、フィリピン国内は元よりアジア太平洋地域の障害者の国際的な連帯のために目覚ましく活躍する、障害者のリーダーである。マンラパスは、マニラ首都圏北部のヴァレンズエラ市の自宅から、自分で改造したバイクに車いすを括り付けて、颯爽と私たちの前に現れる。それだけでも最初は度肝を抜かれた。

ところで「全ての障害者のリーダー」となることが、どれほど大変なことか、ご想像いただけるだろうか。障害とひとくちに言っても、伝統的障害と呼ばれる肢体不自由、視覚障害、聴覚障害の3種類があり、これらの他にも知的障害、精神障害がある。さらに学校現場では、学習障害が大きな問題となっている。見た目では分からない内臓や免疫機能の障害、内部障害もある。これらの障害者が、声を上げようとしたとき、最初にすることは、各障害別の当事者団体を設立することである。そのリーダーたちは、自分と同じ障害者の利害を代表して、リーダーシップを発揮する。自分の障害関連では当事者として最も深い知識を有している。そして彼らは、自分の障害に関わる取り組みには一生懸命であるが、各障害別の当事者団体の運動は小規模に留まりがちである。

●クロス・ディスアビリティのリーダー

こうした各障害別の当事者団体の活動を架橋するのが、クロス・ディスアビリティの活動領域である。つまり、自分の障害だけでなく、他の障害も視野に入れて運動を進めることである。これは非障害者が、安易に「障害者」と一括りにして呼んでいる人たちを、同じ目標に向かう障害当事者として、まとめ直す作業を意味している。しかし、たとえば視覚障害者と聴覚障害者が出会った時、双方の間での効率的なコミュニケーションは、どのようにすればなりたつだろうか。両者の間にはコミュニケーションの隔絶があり、この隔絶は手話通訳者なしでは埋められない。この問題の

根は深く、先進国、開発途上国のどちらの障害者たちも直面する課題である。いくつかの開発途上国で障害者リーダーは育ってきているが、彼らの多くは、肢体不自由者か視覚障害者である。なぜなら、障害者の権利を獲得するための政府との交渉が音声言語によるものであるため、聴覚障害者は不利だからである。

フィリピンにおいてマンラパスは、「障害者リーダーの中のリーダー」の1人である。それは彼が、肢体不自由のみならず、視覚障害や聴覚障害についての深い知識を有し、視覚や聴覚の障害者グループとの親交も深いからである。マンラパスは、フィリピン国会に障害者代表を送り出すためAKAP-Pinoyを2004年に設立した。さらに2008年にフィリピンが批准した「国連障害者の権利条約」に沿った国内法制度整備を監視する「対権利条約同盟」というグループのコアメンバーでもある。さらに彼はフィリピン手話を学んで、聴覚障害者との意思疎通にも努めている。

マンラパスは1971年生まれで、1991年にはフィリピン初の障害当事者による協同組合を設立している。2004年には、「自立生活」運動の実践も始めている。マニラをバイクで駆け抜ける姿ながら、今後も障害者たちの先頭で突っ走ってほしい。

（もり そうや／アジア経済研究所 開発研究センター、やまがた たつみ／アジア経済研究所 国際交流・研修室）



（撮影）山形辰史